



元正間記
四

^ 13
2695
4



13
2696
4

元正洞記 卷之十
目錄



一 牧野備後守大光之事
并柳沢美濃守出陣之事

一 柳沢家門前卜落首之事
并柳沢之息女縁組之事

元正間記 卷之十



Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '徳', '松', '様', 'と', '中', 'なる', '其', '年', '瑞', '年', 'の', '節', '句', 'と', '西', 'の', '中', '丸', '中', '玄', '関', '前', '法', '院', 'の', '中', '懐', '考', '資', '赤', '白', '忠', 'の', '集', 'を', '所', '引', 'い'

元正間記 卷之十

牧野備後守大老之事

在柳沢赤太郎之身之支

當將軍代成政道正之教年

諸人の仇と承一男達のい死罪を治

る御身之さぬ江戸の繁昌殊々

將軍に成せりし所し如く若君誕生

しりやる徳松様と申す其年

瑞年の節句と西の中丸中玄関前法

院の中懐考資赤白忠の集を所引い

青龍の旗一 大吹流を赤龍の天より
うと一 江戸中の夫殿男女下馬走り立子
並んてお見をまうり 万歳を風上赤母と
九条関白殿の姪女より大の臺所様之
其次姫君様之誕生を名を鶴姫様と
号に母を甲斐同心白浪才之清娘と
お傳標と申後五の丸標と申威勢の丸
様之同前より利無より妙多きと純松様
の年より出来りて早世之其後其母様
の子をりて七路姫様迄日成をりて

將軍様之母公桂昌院様之孫故一入の傳
候して姫君を引取ら本桂昌院様に
よりお出の三月とて成長の後紀伊中納言
の御簾中よりとせらと威勢の御
たり申すのこねに申す七路向落の紋を
申法衣より新造の威勢御簾人たりと
丸標の御庫を申す実父白浪才之清友
より作の儀二十倍を新造の石より
追舟を力不よの類いなり一申す
因松成りて一法衣と申す甲斐才

小山田活市と云ふ者意趣まろく白須成
其家討しし行方未だ依りぬの丸標
ヲ歎大方好く天下の威留たりけり
活市もア月の如き良龍ヶ嶽と申す
松平隆興も成飼馬料の積成けふりて
石捕まに戸申引候し小川よりて殊よ
と云ふ白須成男子をくまらぬ其に
八幡の如き遠慮た遺つ病死家督不
松口より作知四才して早世依り其家
絶ふ及じぬ丸標の如し

白須成の将ヲ取之江沢之上に
賜り遠慮の由緒は行方今の遠慮
之悟心胤親と名系は是之叔當
初軍代より神田の茶を以て見よ
取書ヲ建之依り地割り書法の名
ヲ儒者好文院林大弟子に託し
を存し教日河経より書法成就
額を依り木乃活市是を書大に
の書藉ヲ床傍小道具を献上げ
る旨林大弟子に兼て活市の講釈

上ケ夫六月並の講釈を大小名旗本等
至る迄出仕せし御學意も凡日本に
不聖考を建立せし一を小早川
左衛門隆景筑前守名實を建立
近年松小新右衛門將光政後前守
園山平建らば二ヶ所ありしを如當
將軍の代元祿三年より建立せし
らるる名君又をいつしとよする氏
代も久と訴りしを堀田筑前守
にお果し後大老を如牧也後後也

成貞の老中に大老を急にお勤め
息 將軍家の用意に叶當時盛人の
氏平折し後後也石浦の成能上覺
也を本知二万石の処で成く度毎
年の中成之御中目より為りし
出后之真に後後也石抱し後小性
之毒之水とすや一男色の長女年
り例小性御中目より為りし

三妻大隅と及八千石多りり御とん
の松年を系をまよしかともつたは是も
四七石と入る大隅成りり名を
三年目り此河松と決りてつ
お軍様お手討りて系を余りて空り
を成りりり先右は後ちいりり底り
只之をとりりり折し一夜守のりりり
出仕無りり折し亦老年に及りりり
りりり昔り役り免のりりり
りりりお軍甚おりりりりり

皆防り沙法よも不りり及先年紀保
大油之殿り老り年までりりりり
お撲り勢を系を系りりりりり
好まきりり十余年りりりりり
は後ちりりり角力を好りりりり
を補りりりりりりりりりり
は後ちりりりりりりりりりり
俄りりりりりりりりりりり
毎日角力をとりりりりりりり
はりりりりりりりりりりりり

角力取行石抱は後ち後々角力と云ふ合上
之如ま方諸大名方角力を石抱する事との
もく信行心ふしりるを是に危角老表
り及ひし故やまらお勅うき旨に中上
りれり お軍よしを授け名をれは後ち
那いの通や後や免は紅出婦子大子孫口
サお遠かか誓は作身より功成心遂て
身退きし身の上世々危法や後ち
上りし天悟よそせりりり お軍家
や他界の御登城ふきき月印日法神

とく大号居士と号せりり標は後ち
出た空甲や後ち上りり妻大陽也
をりり付りり取しりり病を先
表の決りり無後日世上の風軍子
柳沢出相ち出既日の出りれは長く
公上りり了りり兩雄の争出りり或無
將軍家の甲よりお育りり事出未を
未前を案しりり役を先上りりり
お遠しりり柳沢は彼柳沢出相ち出既
一世の間立方の事と終りり述りり其

根元を尋ねし年 當將軍敏林よとし
宰相を召し様としし年 祿出四万石 御
下廊下を召しお 勅柳次郎を召し
召す日三拾石ありし年 貞享元年
癸卯 卯丑年を召し年 叔木六季の召し拾五万
石を召し八十石を召し取上ケ 甲州府中の城に
賜り從四位少將より任中 大老職に
付 松平の氏号 免しき 甲律の一字を
お領 松平英流と吉保と名乗 嫡子
松平甲斐守吉里 從四位侍 從神田橋

アハ門前より 右盤橋を八町の上を
より中を走下を浦十一ヶ所 誠より
身をして 後には 威勢に 終りし 家門 並年
に 御守をカカ 免し 果報 美人 年 勝ま
目出 度人之 隠居 有て 保山 居士と 稱す
正徳元年 六十九歳に 逝去 在 當時
大和 國 郡 山の 城主 嫡子 甲斐守 家 相續
叔父の 名を 立し 身 召し 由來 せし 年
四ヶ所 甲門の 堀 築り せし 取の 公 旗本
より 水田氏 とし 人 在 彼 水田氏の 地 是

裏通を半花に取ると云は町より今も柳沢
源七郎といつて七百石の御本願の屋敷に
彼源七郎屋敷の首柳沢源七郎に
三十石の時任居せり云々云々云々
氏の時任・永田氏の用人お執りて
何系おく柳沢及事を申出さるる南は
柳沢の家元柳沢権左衛門三子八石
菽田お郎左衛門三子名彼お今三両三石
云々云々云々云々云々云々
人とはと者くぬとけ者古の物候し

源七郎及三子の次子太右衛門出
候に之

柳沢出羽守出陣之事
美之海首く交

多し年柳沢由緒と申奉國甲斐にて
武田家の侍と云はは喜木時
親父を柳沢刑部左衛門と申源七郎代を
式百三十石を賜り敏林の甲廓下書を
執りしに當りお守りたる様御元
の中よりお髪月代仕人云々源七郎

個ハツ奈ヲ砂ヨシニシテツ嫁仕ナクシテ去リ
是十五百石の権をかりし中ニシテ
け妻女の出生を昭示せん或説く折井氏
とシテ小旗女の子と云ふも
ぬくも形もれん
たゞは様ヤ目ヨリ
ヤハシ浮之斗見名作を仰妻女人
事とれんヤ威光ノ叶い難く思ひ内
あれと云ふや死にゆくの中目もい法を
早くも察此君行くと天下を知らぬ
極ツテいづく妻女と云ふは別と云ふ

様ナリと思ふ一ツツ怒ヤ威の御妻を風
流年仕立ヲ砂ヨシニシテ吉系ノ
刻限おくれヤ休息の上ツテヤ越
中上お帝秋風冷やうと云ふは
引上ツテ次ノ留退ツテ例
ておしりりるを留と云ふは
ヤ好色ノ事おまはヤ心解ら
るるの肉ノ別殿を攝妻女を移

之人のそとを教へし妻女とお後の上其身に
腰をえをたえ妻と相しし妻女とを添
寐せしはたつた様よし添右郎の
心添へ威しとらふき吉原へお忍い
のふしつらの通し休甚或は是を未だ天
今日既痛の事味及吉原へお忍いと扱
更をい禁こし扱妻女懐胎の事と十上
なすしつたのやうにむしつたを事な
しつた名を井天下を知らしむるは
とをい初来り十五万石添右郎の添へ

妻女を教へし礼をいし妻女又百石
形を男子を儲け刑罰少補安通或は
少補時貞引續し女子五人未子米倉
丹後中島帳の事の子と都令八人の子
供を妻腹に女妻の子とをい始添へ物
とをいその後伊勢又改し松平甲斐吉里
伊豆後河甲斐三ヶ國百萬石の甲斐米
つた右富をい家門並打物い免り年々
拾万石をい身せし添右郎妻女
を持込し故也保し疑ふと妻の始皇

ハ呂不韋の子之山交澄批を以味成經
定々 將軍天下に由來に任とゆへしを柳沢
赤右衛門側役は作身百石のハ加増給
其年の内より二千石より作身百石五年
石の壹万石より金買しより五千石は
加増しよりより上送出依費の城を
し作身より天和二年の百元禄元年を
拾万石に年數十二年の百元禄七年に
武州川越より所留より作身より五年に

ハ加増を以て廣永五年を十五万石百八
拾石ハ加増也
檢現様ニハ以て是勝より御方ハ奉公
仕毎度法外を以て戰場へ出給肯を
存しれより多榊原大之保漸く
十五万石限り之流を昂成平侍を以て
從四位少將より任ハ大老職は作身
全禰大老とハ決を酒井左衛門尉榊原
式部左輔兩家之井伊掃部頭とハ大老之
年を以てしハ大老の上のハ執職の家

いゝ大老と云ふ所は、
特系以後の大老と申すは、是ハ、
家々々々大老、
の上坐、
此れは、
中のお、
着板、
中の上、
着板、
中の上、
着板、

いゝ大老と云ふ所は、
特系以後の大老と申すは、是ハ、
家々々々大老、
の上坐、
此れは、
中のお、
着板、
中の上、
着板、
中の上、
着板、

運上船一の酒を飲よや

其以委長金吹誓元禄令よ米志人の色
零く米言出年

今朝の菜飯と大根の葉

と云小唄とやふ夕陽運上落く取三よて
酒の虫伝ふる言出年一完中好
叔存降ち後の特樂居後分ソ組の傳
什と炎流も皮五人の志女と松平吾宗と
志田豊後中後七屋出羽中後山城と後
大久保加賀と後白根組と作月松平左京

黒田内後三人の例ヤ用人七屋大久保

老中の嫡子とつり松平左京右史松平伊豆守
次男よて七千石を知よて伊小姓と作月
柳次よ續とのヤ出居一世の男七万石
上り言崎の城と云志田豊後と中上
島解由次男よと是し伊小姓とお助五
百石方三万石上州沼田の城と内後山城と
内後老前守と志武千石と二万五千石
上州安中の城と云是し伊小姓とお助
夕輝よ三一身と致三人在り例ヤ用人

此乃也誠年之前代未算の事成り也

元正間記 卷之十一

元正間記 卷之十一
目錄

一 小姓庇立身之事

兼護持院中建立之支

一 上野中堂勅額火車之事

兼妙月比丘尼中仕奉之支

元正間記 卷之十一
ヤ小性元取立之事
并復持院ヲ建立之事
黒田内夜を始メヤ小性の西之縁に立
遊一々 乃軍家別と果等を好
ませり不扱思事ぬ元立身教多ゆり
若は後前ちい九右丈と中七十俵に
ヤ徒元より能を報を打ヤ元入
多り一ニ妻大隅ちと牧也信後ち小性お
朝小入成の八千石をヤ取立たの外

元正間記 卷之十一
并復持院ヲ建立之事
黒田内夜を始メヤ小性の西之縁に立
遊一々 乃軍家別と果等を好
ませり不扱思事ぬ元立身教多ゆり
若は後前ちい九右丈と中七十俵に
ヤ徒元より能を報を打ヤ元入
多り一ニ妻大隅ちと牧也信後ち小性お
朝小入成の八千石をヤ取立たの外

大当但此中の子力近更後も大京を支配
す此味より及いぬ家へ中成の節中目足仕と
中目濫を以別五人と中成ケ之勿得中成
より石全とせしと等し親兄弟並面お付
いよと兩家の屋敷廣きより中成を其屋敷の
内中中成を立せしと家へ中成け乃
中成六拾余人の中成其介中成代大
名籍中の内中成量勝とせしとを次男三男
と中成子と名出後しと京都石司代
松平紀伊守とら中成の家次男

三男を中成とせしと前田土雲とせしと
堀川とせしと中成千石三石とせしと
中成前後の英男にせしと日勤之大概中成
性之成百二十人程英後も大京を支配
し中成前向の勅方毎月の神文深秘
事之當書の中成毎日常日中成物
中成具端物中成持中成目附中成
中成及中成中成中成中成中成
中成百中成中成中成中成中成
中成中成中成中成中成中成中成

宗事不叶是と其歌らみ石ころの夜具布因
中巻卷のちよ〜 如軍の在世の内と大切
この宗へ入るや他界まで〜 上野の増上寺に
〜も持たし焼捨灰を俵うけて海へ流さ
是を中稜物と云うや言ふ叶へら大京
豊前山城のとも〜 大緑よりあまを志
う〜 大名の流え流の小僧と首尾解ら
十人より一人りて一年の首と不首
尾より〜 柳沢の信分
お〜 出 武田織部五百石と

表高家役ら作自是 武田信玄の惣領
〜 就法と中盲人りて一生戦場へ出さ
人の子孫に柳沢の信玄の由緒述け人
を〜 甲斐郡内より居士と成る
武田家の重宝持傳店まで〜 悉く
柳沢より〜 と云 叔父信玄の後孫
と云く小緑と云ふ家二病字に反快氣
信松と云ふ病と云成〜 事と云 其法と云
の山人と云ふも寺より出さるる法平
祈禱の名人と云 由法と云〜

うらむ彼法を招き祈禱を教げり受
時の法をうりあまは法への祈禱して快氣
をなす是より信心深きに對し法を
占り妙きより法を廓ききとおもひ
たより法様や一生を以てせりし君
ふりし天下を念し自事目おこしき
其身の事をこぼりし遠くいそ事を
そい三年の中に一城のことか未だ官
録身は餘り天下よき人と成給ふ
宗報疑ひたり我中不相遠なる

破戒の乞食と承しと之法を即ち持
の思ひをちし法信心深き志意より
りし法より其考より相違なり三年自
り難林を天下にゆきし法遊法大に界
子承三子石より取立之法を界
將軍の口様嫌能おを伺ひ彼の法を
占り法披法をいふ也然るに法りし故
も其寺の末寺より出法の法を成しを
左侍心尻波心の別南職を任行知
息院と号し其後將軍中秘苑の

鶴姫君ヲ不嫁の旨柳伏ヲ九持
ヲ祈禱シテ御身ヲ延中ノ念及
ラキトシテ高桂昌院様ニ目
前ニ柳伏言上ニテ信心深ク
神田橋のりヤ地端より百間四方の地割
ニ紅舟ノ寄法ヲ行秋元但
傳有言云茅由成ニ先花深
付七堂伽藍ヲ建立元禄五年
筑波止知息院ト号其後護持院ト
及女大僧山ノ任東叡山門之曰格

トシ系物ヲ玄關ノ横舟之寺
是教夜ハ成ト下ノ新紙上野
門之増上寺トシテ叶を護持院
ヲ繁昌ノ御江戸之落首
神ノ根付佛ノ業師人ト云
醫者ト有久志寺ノ護持院
也カキキ業師ト上中寺ト云
柳伏ノ事ノ久志ト云未
付テ何ノ医者ト云彼護持院

古今不と儀の僧よて 將軍雷を嬉
せふよとく川く護持院の法カよて書
ししととを説をいふとを須江戸よて
後く雷の鳴しる事なり 將軍の一世の
事らむ鳥をたふしつて種々の説
を後く他の皮を説く 文照院様
の代よ成と事しる護持院の法カよて
火消の補の跡の地を護持院の寺よて
しし其師の之説を

護持院右後河卷中をてせらきて

火消の跡の地をてせらきて
又一つ橋の七寺の如く盛ししは後年中よて
焼ししは法の口を説きいふは師の傳し
寺僧も護持院の寺よて成焼の跡を
持院ニケ寺と成焼の跡を麦畑とて
鷹場平の師の傳しをてせらきて
東叡山中堂山門の建をてせらきて
妙月比丘の仕をてせらきて
斯く護持院の建をてせらきて
後桂昌院様

のヤ移りついでして大隊の先鋒月谷への道
第ヲ見えしより護国寺を建立す是れ
去る宗よりして本寺より観音堂を
官盛久くあり奉りしより京都より
招りし桂昌院様より京都東山より
中夜生をとり切夕之御中夜の上首より信
心降りしに是年依りて建立す之れ
江戸ありし上社坊上より漢一りの大寺
より寺依りし石を所らして山前九町
の間茶屋兩側年々之れより托女を免

より喜羽町と名附らるる中夜坊成就
何れより京都古蹟の釈迦下向
六十日の閑帳をとりしに隣を万六百人拾
兩より前代末旨の事大なり
将軍様より度りて成を後坊院より
とて威勢にまがはし東叡山
中堂山門仁王門廻廊浄土堂浄樓堂
清水山王門のまの門を建立奉り秋元
但より中夜坊松平藩厚く元禄七年右
中夜坊始り同十一年に成就せり凡日本

の諸職人集り江戸始ての大伽藍を造り
張りし事之知息院護国寺東叡山
ニケテのヤ夢法起り諸職人洵次大工
たりしれんとて大ニた宮を考者木挽ホ
りむるを働く時と半天浴衣を志し
りんたさ中往来甚い越後ちこ石端
の帷子纏綿細の下帯に七子の帯と志め
秋冬ハ八丈郡内のトヤ袖と志しヤ夢法起
ハ通上ケ様と志し事ハ昔語り年々
少に然中上社ヤ夢法ハ山中を切籠

屏風板車板清水板ニケ所の板を仰り
薩大寺後ヤ中傳の事終れ其美蘇麻
之人一方を山王の宮作り日光の法
宮を移建之中堂の本寺業師也末
京都ハヤ於る今上皇帝東山院
ハ震筆瑠理殿の勅額ハ中堂に懸る
山門の吉祥閣ハ將軍のヤ筆仁王の
東叡山の額ハ日光ハ門王のヤ筆なり
元禄十一年九月廿一日勅額江戸ハ光
の御不川ハ上社を見物市と志し

只お軍の武威をとり威斗り候も
其翌日朝四つ時系橋南緋を町分出火
南風烈を吹火四口に來り一助、通界
日本橋、神田へ焼く一助、八丁橋、美原
橋、深川へ焼く一助、四日市、少烟所
、五木、分、清、之へ焼く一助、遠橋、渡、美
、下、谷、上、北、車、坂、屋、尾、坂、下、通、全、校、の
千住の大橋をとりて其敷八つ時大雨降
り火落り上せ下にて焼死人数未
及下、殿、東、叡、山、之、妙、焼、失、成、可

知り奉むを以り大名一火消を仰月
被り火消め人数山中一人未り禮走
集りて建之の伽藍一宇も焼く
是を世上に勅額火車と云り
お軍の武威を以り宸筆中於と云
天子おらや宸筆笑東へと下事高
逆鱗より候り風吹せり被り
勅額、通の、道、筋、妙、焼、一、助、中
勅額、火車とハナり候り取ら額中
堂に掛りお軍の上世に中系法光

門よりて、食應を此御門と
將軍の配帳と 將軍不斜、秩媛
年々上舟くをる石加増之け時
上野、子不之門主、赤し、尚、東山院
才一の皇子、中位一、親王、幸、伴君と、
なる、中、自、身、配、帳、し、事、前、代、未、耳
お、年、中、威、光、盛、人、なる、事、又、と
天子の御徳、表、し、る、級、り、但、し、と、る、る、
ふ、し、と、名、て、の、事、と、と、評、判、を、
定、年、中、威、光、盛、人、なる、事、又、と、
上、舟、の、後

日蓮宗のち、本、寺、は、祖、師、の、御、記
し、大、寺、の、五、重、の、塔、在、二、十、四、坊、在
か、百、石、の、中、朱、下、付、き、境、内、甚、景、を、寺
之、又、日、門、五、と、なる、麻、布、の、内、年、で、先、し
威、意、ち、子、お、ぬ、大、寺、と、に、た、中、日、蓮
宗、の、信、の、者、多、く、十、に、し、し、法、光
宗、門、の、事、今、し、日、前、に、お、る、に、
中、女、中、の、内、妙、月、比、丘、と、なる、後、し、
尼、と、た、の、寺、を、教、い、令、銀、と、
取、入、を、敷、し、け、し、令、銀、と、なる、の

ふむも人情の有りし彼尼の色衣を免し
しるも衣極し法を破しとす一の
科成ししと上尼を決らひしと右二寺
の祥傳宗と成しし事をも移し尼を取
持しし中真念様を怨ひしと之祥傳宗
と無不絶石文ししと天下に停止
成しし法之夫のし移しに威意寺に彼
妙月尼と密令し及しし事露破し
日蓮宗發意とぬし妙月尼の石捕
り論の旨に宰舎ら仰旨終し事来

の悪事成しに戸中引込し不問に推し
磔し掛らさしりお中日のおふ寺古
より取遣しれ寺僧百余人遠寄り尼有
谷中の上野へしり並是方天台宗と成
是と傳し上妙しと密事成
少へ上妙方し中し法しと
云其刻深川妙叡山日美水へ飛し
日本国中を寄りし知り清お
し是に若中威應寺退轉の旨仰言
祖師の御氣を御供して江戸へ退

紀伊中納言様日蓮宗の信
彼書を以て公儀へ作進せし
中阿含論年より穿入を考へ
一若教多き日叢水...京都東山十八
年深き四代誓り為の沙法お止し
のヲ教を以て若中隨林と
ちもよりま方隨外寺よ
一命を抛て、祖師へのた
る旨の筆

身命を以て一日叢水を
のヲ教を以て天の威光
不叶なるを捕まへし
心助とて其旨を教
し、其旨を以て
のよら妙叡山日叢水と

元正間記卷之十一

元正間記卷之十二
目錄
將軍口講 祝之事
若萩原土左公肩掇 約奉行之事
大川憐 懸之事
是大小屋中書 結之事

元正間記卷之十二
目錄

- 一 將軍口講 祝之事
- 若萩原土左公肩掇 約奉行之事
- 一 大川憐 懸之事
- 是大小屋中書 結之事

五丈小園の御書

一丈の御書

目録

五丈小園の御書

五丈小園記卷之十二

將軍の講釈

并萩原次郎綾約奉約之文

去程身 將軍併神を以て教旨三ヶ

所の大伽藍の建立を且又江戸に欠る

三十三間堂の建立を以て河内八幡の境内に

三十三間堂建立を以て河内八幡の境内に

教をたためん也 依て大名諸本中迄

知行言より割身等進み御書の教を以て

成就も昔の教討を以て酒井雅平氏

家来町田小助之妻古七屋相持与家来
依平幸八郎等与とり大矢教之れなく
柳沢出ぬ中家仲小五左之り三度目
村出し六八百本江戸一の額を掛
是御主人柳沢物入より勿いぬ
三度近小五と伊右左衛門をより
と徳大名の家申鹿之能く七
稀成平柳沢元来三百三十石に
若黨と兩人の命をきく年々加増
隨て親類より石抱侍分浪人由流

と山一統能情きくを撰と抱らぬ是
候御の者なき能くいふ一誠平能
人持之れを 將軍あて申す中
年々とるるを例に練舟一平は行渡
白山ノ殿より毎月申方申方目付使
より申す本中より給ふ見分とく
御法書のより同心より近き候炮
両所より左御より武の急り
叔亦 將軍家取堂に建り自方
款可ととく 毎月三度の定日

一日ハシ三家ヲ家ツル所流大名一日は流
役人ハ能ハ中一日ハ朱下トモ並々トモ情
テ院の事ヲ集メモ多シ論語の諒親を
キお陸の面ト感涙を催スリ此時ハ
清江の懐中ト出来テ利ハ清江ハ繁
昌左のモトハ天下ハ己時ト輝スリハせ
ヤ大勇の大意ハシハ代ハのハ憚人ト高
お屋のハ代ハ成ト年ハ減トハハハ
天下のハ右切成ト柳尺出羽也ト云々
ワシハハハハ天下のハ右ハ成トヤハ智の

役人を撰オキリリシス若シ老中稲垣對テ
若シ甚定ト役萩原若治郎ハ撰メ
出サシク稲垣ハハ代トハハハハハハハ
萩原ハ甲州侍トテ終ニ百石多ク追
ニホ七百石トハハハハハハハハハハハ
若シ当代の悪ニ摩ハ道未代近義氏ト云
キキハハハ大悪人之稲垣萩原ハハハハ
合セ天下のハ使好トトト種々の選上ハ
取上トト才一天下のハ宜實ト長合ハ
令銀也

控規程が已来用へ来り起り近年天
下の中金不足仕交長金いふ事の金平て
文相一令て天下の極平さくおける
とて金令の通用たると一若く長金を吹
替へて銅を交へ千両の金とて五分兩と成
基天下の事と披露仕へ元禄七年
右金を吹替へ元禄令とて五分百姓
通用能うと一とて一若く長金を吹
大加減令とて五分銅と吹替へて五分
見くらと一とて浪も四ら突とて五分

銅とて色赤黒く石尾を見らると一
依り金平浪仕の者共といひて起らぬ
後用金と一俵と稲垣皮萩原皮
新よりと一兩家へ元入令と浪とて家老
用人近種と浪序と一とて人の序年
仕用と一令浪序と金平内年大
英と妻事法平道と一とて元禄令平
たると等と一とて似せ金影と妻出と万民
の炊いと成と一とて似せ金影と妻出と万民
とてと一とて似せ金影と妻出と万民

者と名捕粒夜磔よそとて是獄門より
といふに更年止事ありし事福垣萩原
中為役俊好を兼り萩原をいひ先京大
坂奈良良堺七集内中国の冥東ハケ玉の
中流入祈をも見ふの爲一ヶ年う宿見那
一先追と名役の如く中運上取上諸氏を苦
しめられ何となく拍強しを志し金浪
山法木山林新田本見立の務うい何とせ
らに中流よ成りし事い可中出ととられ
寺へ流しよふとてニケはの山師たとい

の見立を各一近江ちへ便り種々手入
然をも上り欲徒の相決つて移つて五人
七人せり合中運上中運上をいひち
家老用人の金浪を振らせりし程年
彼者たに能事とて今一程の叶し擧
りてふし金浪をつらと取らりし程
不飲の曲者たに板亦をいひちをいひ擧
樂町にあり或時自火をいひし程中流
らり焼しりあり火流しりあり金浪生
い中に及に原小三郎紀伊玉屋

六之清塚屋善六叔と云ふ山師は八車牛
車、杉木板、沖舟を積り、押来、其外天
下の川用達、大工棟梁、又々木挽、た官を
我先とお告り、翌日、地行、まゝ、夢清
より、身、分、お、様、余の夢清、大り、斗り、出来
を、い、ち、お、入、お、一、族、し、た、り、家中の者、其
中間、部、屋、追、備、後、表の、夢、を、お、た、り、
其、後、日、志、一、下、屋、浦、お、お、領、ぶ、り、一、重、て
火、難、の、高、用、一、り、お、と、ま、り、夢、清、心、を、其
下、屋、お、い、表、門、通、り、井、敷、の、田、之、裏、門、小、く

表、表、屋、十、間、斗、亦、登、之、く、屋、昔、日、の、至、根、り
り、麻、相、り、い、見、お、れ、お、心、の内、り、入、り、と、ま、り
家中、亦、通、見、新、石、を、お、神、お、告、雨、天、の
御、足、結、年、及、と、い、家、中、若、屋、若、り、一、を
他、之、路、り、名、札、を、り、ち、目、志、ら、し、た、り、お、
地、取、言、り、故、井、戸、十、五、間、古、守、禮、と、井、戸
を、り、い、お、新、赤、洞、り、て、お、り、是、限、生、ら、た
り、其、冥、書、院、い、り、り、及、ハ、氏、其、屋、亦、追、浩、構
を、り、り、り、是、皆、日、天下、の、川、用、寺、道、の、者、在
り、り、事、及、り、双、の、夢、清、心

文照院様中代急中役有石敷三子六百石
を子供兩人と石敷を以て下並萩原法六
六百石次男彦治郎一四百石孫江守大
左衛門右衛門住居石敷も家来も大智浪人も
其中より永井半六と申ける用人差て京都
柳のり場より屋敷を調い置りし是二千
兩の屋敷に江戸より神田豊治所より八百
兩の金一丁を以て國橋が一丁目と申る相
摸の金と云ふ大茶屋の屋敷と三子五百兩
の地面と大左半六次男半九郎と云ふ者に

金二千兩を以て江戸近在小倉の玄中
寺に寄附し呉き一丁より小金を以て年中雁鴎
場と成に江戸の四里を以て玄中寺の田地三子石敷を
持し大百姓の笑を以て小倉の玄中寺
松前町の民部連中世に院を以て寺の権利
半六老中半六人より京都より居候を以
泉の内より田地五百石を調い置一生安樂
り世を以て送りける用人の半六より世に
いし人やおもひを以て内においし人
是等所人百姓の骨を以て油の金を以て

板金銀吹替に未だ新錢を铸出さず
是れ文錢と遠い錢少く薄し是れ近
文錢なるを新錢と稱す事法人甚
きなり又其後大錢を铸出さず是れ
文を十文とせし寶永年中の事故
寶永通寶裏に永久世用ユウクイ珍の字
に出未けりゆ法人諸君を十文
にして買ふ利志のれは戸に九六の錢ゆ
甚く不自由なり故に大錢を铸出さ
ずの位悪く後より漸く七八文とせし

其頃天下のソ排子と皆大錢として
是れ信く年中ソ城のソ書法兼くお
小書法方ソ用事在大錢のソ排子と極
速きなり宝永通寶永久世用珍字
エウクイソ排小書法大込りの狂奇ゆ
永く久く世に用いしと云ふ四字に
ありし用しと云ふなり之れは福
萩原の事なり是れ大書法柳澤出
しし事なり是れ大書法の禁
事なり大書法の禁事なり

さし

生れや憐愍愍く事

周ら孔子の道をもくく始し聖堂を建てて
神社佛閣を以て建立絶つるをねたふるの
道急如く諸大名を以て元をくく日にま
江戸の繁昌往古平情よりかゝる目出度
や代もくく美民もくく法を打ていや
子白くく近しふ代菊家とくくしりる
耳 將軍天性殺生を嫌ハセくく前
代を遠くく應を止くく厭くくく能を

好くく四座の猿樂時をほりくく金妻の
舟子の内くく多七を夫とくく者上か
くく下をくくあは一流を深し
才一員男ありくく能ふ此の名人ありくく則
以取之をくく小夜や能をとお勧めりくく扱
や例を夫とくく親世令其保生令割平
上座くく甚く出た事を評くくや性
保れくく多七を夫を改中余河内と
号くく千七百をくく其子とくく中条
嘉之儀とくく南時や公組や其本

お鞠りの上をさふ下をれを是より諸大名
一統に能く時行の儀本の備くより五をを朝之能
難子より一日をさるる一より町人玉性を
も淫を智いぬ者も好く法をを打ぬも
稀多科 諸浪人を大小名へと抱よも
淫をよりあゝの教を打ち笛吹を吹味より
抱より其の立にし笛いぢよりとせり
法のみ道はちのを挺を鞠め淫を
親世の才子或は菊流表多をよりひひ
おとすよとより古来より諸浪人が

石抱よりとより立よいらる諸浪人又は文筆の
吹味よりとより丁を武士のふえ好よりとより由
緒ふより侍を役者を抱よりとより成よりとより
いつきの大名の家申よりとより本流を止め礼を
とより今川織とよ事時行よりとより具足第
の蓋をを御よりとより見れを何しよりとより是に
とよりぬよりとより具足仲秋よりとより言い
誠より美少少の代よとより代衣波よりと
入よりとより大是いらよりとより事大
お軍毎月のもく柳次及た京友又と

本庄因懐ち後へ成度へ能く
自他と武道おとろい危う
中へ其氏又老人の出立出来
ア譜代の中松平伊賀忠後の
大園之本おこる石ア加増
をりゆり信公以上田の城
ア小幡より名出間しゆく
御せらまは側用人松平左
御分らまは是れお成を
け人志し一山一城一切
御分らまは是れお成を
御分らまは是れお成を
御分らまは是れお成を

其く去年より近年再い召出
ア老中より御分らまは是れ
ア本丸の中へ紅葉山建世
檢現様ア宮夫よりア三代
上野増上寺ハヤ系法母
殿へア系法在事へ物より
多くをんへ取へ殿中
入る是を信人とし武と天
の下よりまは何十丈と
内の事取申へ信くへ方
便取へ

お軍基、狐をアキ、いよ、教十丈の神
或は物をアキ、何の一回、のアキ、又、
アキ、また、か、一、五、さ、ル、ル、狐、い、え、り、犬、を
アキ、者、ぬ、そ、ろ、ア、殿、中、へ、狐、入、事、ぬ、と
アキ、や、お、軍、取、り、犬、を、電、さ、せ、多、く、ア、ル、
只、狐、を、防、ぐ、つ、き、お、ろ、く、事、ア、ル、
坊、主、お、狐、の、事、ぬ、い、と、ん、将、軍、犬、を
ア、大、切、り、遊、ハ、り、是、我、と、り、何、れ、犬、を、お
遣、仕、事、ア、ル、随、分、お、役、を、と、り、と、
と、原、分、た、く、と、少、法、と、及、ふ、け、年、を、日、也

此の歩兵、ア、祈、禱、所、を、兼、り、護、持、院、僧、と、
是、し、を、柳、尺、皮、ア、リ、と、い、お、軍、犬、を、電、
さ、せ、多、く、事、勿、得、の、ア、キ、と、い、は、れ、丈、犬、を、
不、動、明、王、の、法、の、つ、り、め、に、運、を、守、教、
者、之、能、憐、み、を、と、り、ぬ、け、い、事、余、も、久、く、て
武、運、と、お、付、ふ、去、年、の、何、れ、飼、主、に、
能、知、り、ぬ、と、い、は、れ、犬、を、守、り、見、え、ら
す、者、一、と、い、は、れ、何、れ、其、に、告、り、討、文、
将、軍、様、よ、い、成、の、年、の、ア、キ、ぬ、よ、り、何、れ、隨、
分、犬、を、ア、大、切、り、遊、ハ、り、何、れ、法、天、下、

を平国去安全 將軍のヤ事命を之と
る一と事終ら柳沢大いし怪し是了地
君へのヤた名にと者にとり定り 將軍に
た輝のヤト心よて大をヤ大切と捉はしと見
得しヤ様嫌を伺いも僧の仰をえ上り
とたご趣き 將軍への披露有えりまに
元よりヤ考教を護持院り進めしよる事と云
取次人と柳澤をれらむの事と江戸表と
中に及んだ日本國中にお觸大を大切
中付し一差高細をこの上分い其終り

し一たきいぬき大い飢命り及ふ事たうま
志うしつと地を見立大をえ立小屋を志
つし食り困りし様し中付し一出羽
た京古吏臣をお後をふ没人を中付し
むより源流え禄六年のた日本中
へとお觸未代よと迫大 とも様と難
え中ももしけ及し是皆後持院僧心
り而え年一とヤ悪名をたしし是か
ヤ表中終り役人の決定と来し大小屋
を志つらふし地を見えりしとあり

四つ口の末、中世系と云在る日本橋分
北西の角より二里半をけり御寺といひて
至皆四方の地を分ける地割をいひて大小屋
伊勢清の甲子傳を真平と記す九百石
系極縫皮分六石二石大兩入と記す
百貫ついで取る地をいひて伊勢清
をいひて四方の柵を振るる内に小屋
をいひて板垣をいひて土官より西
の屋根板垣をいひて土官より西
と南小の門をいひて大屋役人小屋

食物禁出ト小名大名要交回前之書法
教至人の大工人是を以て食取のりり
那を急ぎ書法志す所又其以て
る他者もこの事ふ身上に人足日産
の者も手留法に記すやれを何者
り考へたり人中野名に狂奇を記す
英記と記す事いふ能板の

中世の系年日産剥取
系極皮より内福に記す事
滞りし事記す

四ら目結令少の糸く縫成外
糸野糸極上と人々より非利
...
元正間記 卷之十二 年入也

